
君への旅

Ykiki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君への旅

【Nコード】

N2066D

【作者名】

Y k i k i

【あらすじ】

旅に出た。君に会いに。僕に会いに。世界に出会いに。（手紙形式＋短話形式）

First TRIP

突然だけど、旅に出ようと思う。

この町は凄く素敵だし、大好きだ。
君もいるしね。

でもなぜか、旅に出たくなってしまったんだ。わかる？
実は僕もよくわからない。

でも行かないやいけない気がするって言ったら君はどんな顔を
するだろうか。

それでもさ、電車が夕日の沈む町を出ると、不思議な気持ちになっ
たんだよ。

なんだか自分が夜に飲み込まれるためにここにいるみたいな、そん
な気持ち。

君と一緒にいたら。

きっとこの先に朝がくることを疑うこともなかったのかな。

ああ、そうか。

僕は君と歩く人生のために旅に出たのかもしれないな。
こうやって、僕と君を素直に感じ、見つめるために。

僕のことには心配しないで。
また手紙を書くよ。

じゃ、またね。

F i r s t T R I P (後書き)

写真付きで載せたい作品です。

Second TRIP

久しぶり、元気にしてるかな？

いきなり寒くなってきたから、風邪ひいたりしてない？

僕は今、海と空が交わる場所を見ながら、君のことを考えていたよ。

晴れている時に見る景色も、ものすごくキレイで素敵なんだけど、曇ってくると境界がわかりづらくなっていくんだ。

海と空が溶け合っていくみたいに。

この曇りの景色の中に君との日々を見たんだ。

僕たちも曇りの日こそ、溶け合って一つになれたらいいな、そう思ってたさ。

それでも今は、君の心が晴れていることを祈っているよ。

それじゃあ、またね。

Third TRIP

今日は天気が良くって、思わず上ばかり見て歩いていたんだ。
一回だけこけそうになったんだけどね。

でもさ、おかげで不思議な木に出会うことができたんだ。

その木はさ、その木の下を通った人の願いや祈りの実を成らせるんだって。

だからきつと今この中のどれかは僕の願いの実なんだよ。

この実が落ちる時は願いが叶う時らしいんだけど、その時はきつと君と一緒にいるだろうね。

この木の秘密を教えてくれた人はね、なんと10年も木を見守り続けているんだ。

毎日雨の日も雪の日もやってきて、近くのベンチから木を眺めているんだって。

そして実がなったり、落ちたりするのを見て、ほっとしたりするらしい。

たまに鳥がつつきに来るとハラハラするんだけど、彼は何もしないで見守る。

そんなふうに木や実を見守りながら、誰かの人生を見守っているのかな。

ひょっとしたら、彼は自分の実が落ちるのを待っているのかもしれない。

ない。

だとしたら彼の願いは何なのかな、10年ずっと願いが叶うのを待
つてのはどんな気持ちなんだろうか。

誰かの実が落ちたり、鳥に食べられたりする時、彼は何を想うのか
な。

彼の思いは想像できないけれど、とても大事で暖かな願いが彼に届
くことを想うよ。

それから、君が僕の帰りを待っていてくれることを、とても嬉しく
想う。

でも僕の実が落ちるまで鳥たちには悪いけど僕の実を食べないよう
にお願いしなくちゃいけないな。
そんなことしたらまたひとつ、僕の実があの木に増えることになっ
ちゃうけど。

今日はちよつと長くなっちゃったな。

まあ、いつか。

それじゃ、また書くよ。

A man under the TREE .

「お父さん、この木のお話をしてよ。」

「またかい？本当に好きなんだな。」

「ええ、大好きよ。いつか私に子供が生まれたら、この木の下に来て、祈るの。」

皆で仲良く暮らせるようにって。たぶん実がなってもすぐに落ちると思うけど。」

男は一人で暮らしていた。

長年連れ添った妻は3年前に病気で息を引き取り、一人娘のアンナは10年前に家を出て行っただけ、帰って来ず、今はどこでどんな生活をしているのかもわからなかった。

男は娘が家を出てから毎日、街の外れの丘に行き、ある木の近くにおいてあるベンチに腰をかける。

もうすぐ春がくるせい、今日は風もなく日差しが穏やかで、思わず空を仰ぎ見る。

「ああ、俺の実はもう鳥にやられてしまったのか。」

男は落胆し、吐き出すようにつぶやく。

明るい空の色や暖かな陽気は男を全てから置き去りにされたようなさせる。

「サリー、俺はダメな父親だったのかい…？サリー、俺は一人ぼっちだ…。」

彼の妻であるサリーが生きていた頃は、毎日ここに出かける男を送り出し、肩を落とし帰って来る男を暖かく出迎えた。

「大丈夫、まだ実はあるわよ。あなたの実はきつと固いから、鳥だけじゃない、リスだって食べることなんてできないわ。」

「アナタは今日も誰かの願いが叶うのを見届けたのね、素敵じゃない。ひよつとしたらアンナの実かもしれないわ。」

サリーは毎日毎日、来る日も来る日も彼を励まし、元気づけた。

そんなサリーに男は苛立ちをぶつけることもあったが、サリーはそれさえも包み込み、男を支えた。

毎日丘に通うようになってしばらくすると、男の事が町で噂されるようになっていったのだ。

男とすれ違ったびに街の人は、からかうように声をかけた。

「おっ、今日も行くのかい？俺の実が落ちたら教えてくれよ！」

「もついい加減やめたほうがいいんじゃないか？」

中には心から気にかけて声をかけてくれる人もいたのだが、男の耳にはけなされているとしか聞こえなかった。

「街の奴らは噂してる。あんな物語は迷信だ、俺の頭はおかしい、狂ってる！」

「そんなことないわ、アナタと私は知っているはずよ、迷信なんかじゃないと。」

「しかし、しかし…、それさえも信じられなくなってしまうんだ！

わかるのか！？お前にこの気持ちか！！」

「わからないわ、だって私は信じているもの。あの木のことを。」

サリーは男が不安になり、苛立つ日には必ずこう言った、

「ねえ、思い出して。私達が一緒になった日のことを。私に話して聞かせて。そしたらもう一度信じられるわ。」

男がまだ若かった頃、母国は戦争の真つ只中だった。そして男もまた、戦争に駆り出される事になった。

同戦争で父を無くし、兄もまた戦地に出向き、母と妹と3人で暮らしていたサリーは、男が戦争に行くことを酷く嫌がった。

これ以上失う人を増やしたくなかった。

愛する人がいなくなることを、恐れていた。

男は、そんなサリーに、

「仕方ないんだよ、行かないわけにはいかない。でもね、必ず、必ず生きて帰ってくるから。」

と伝えるしかなかったが、それではサリーの不安は拭えなかった。

そんな時、小さい頃に聞いたお話を男は思い出した。

「サリー、あの丘の木に祈ろう。再び僕らが出会えるように。」

二人は街外れの丘に行き、不思議な木の下に立った。

「戦争が終わったら、必ずここに帰って君に会うよ。」

男はサリーに、そして木に誓った。

「戦争が終わって、アナタが帰ってくるのをずっとここで待ってる。」

だから、必ず帰ってきてね。」

サリーは男に、そして木に祈った。

その祈りに応えるかのように、それまで空を覆っていた雲が流れ、月明かりが二人を、木を照らした。

次の日、男は戦地へと発った。

それから2ヶ月して、男からの連絡が途絶え、その3ヵ月後にお互いの国が和解し戦争は終わった。

しかし男は帰ってこなかった。

サリーの兄が帰ってきたときに、男が重傷を負い、生死の確認までは取れていないことを聞かされた。

サリーの兄もまた足に重症を負い、もうすこしで危なかったと言う話を聞き、男はもう死んでしまっているのではないかと街では噂になった。

それでもサリーは男を、木を信じて待ち続けた。噂には何一つとして裏付けるものはないと。

そして月日は流れ、季節も移り変わり、またあの夜がやってきた。さすがのサリーも、もう男が帰ってこないのではないかという思いを振り切れずにいた。

「もう1年もたつのね。あの夜、ここで祈ったことが夢だったんじゃないかと時々思うわ…。」

サリーは疲れていた。

戦争が終わってから今まで、木の実が1つまた1つと落ちるたびに

男の家に走り、鳥が食べるたびに知らせがあつたらどうしようと思ひ回されていたのだから。

サリーがすぐるように月を見上げた時、暖かな風がサリーを、そして木の枝を揺らした。

サリーがふと木を見ると、ぽろりと2つの実が落ちた。

「あつ」

「あつ」

2つの声が重なった。

「サリー？」

サリーが声のしたほうを見ると、そこには男が立っていた。

「サリーー！！」

男は声も出せずに立ち尽くしているサリーのもとに駆け出し、そして抱きしめた。

こうして二人は再びこの木の下で出会った。

「アンナもこの話が好きだったわね。」

「そうだね、何回も何回も話してくれと言っていた。」

「アンナも信じていたのよ、この話。だったらアナタも信じなきゃね。」

「ああ、そうだな。街の人の噂なんか気にすることはないな。」

「そうよ、アナタの時だって皆死んでるって言ってたんだから。」

そう言って二人は笑って、また朝を迎えた。

そんな日々は、やがて男の考えを変えていった。

アンナが出て行ってから、ただアンナが帰ってくることを願っていた男だったが、サリーの彼とアンナを想う優しさが、アンナへの気持ちを変えた。

男はアンナが連れてきた男、ロイが気に入らなかった。

何をするにも時間がかかり、力仕事なんてもつてのほか。何をするにおいても頼りにならない。

そんな男にアンナをやるわけにはいかないと考えていたのだ。

だからアンナが結婚したいと言い出したときには、男は反対し、他の男と結婚するように勧めた。
当然アンナは嫌がった。

ロイと結婚できないなら、誰とも結婚することはしたくないと。

男はそんなアンナを許すことができず、とうとうアンナはロイと家を出て行ったのである。

男は後悔した。

サリーの優しさに触れ、頭ごなしにロイを嫌っていた自分を責めた。

なぜあの時ロイともっと向き合えなかったのか。

そうしたらきつとロイの良いところを知ることができたはずだ。

男はアンナとロイへ詫びたい気持ちでいっぱいになった。

そして相変わらず毎日丘へ通っているある日、サリーが病気になるまで。

そして鳥が一つ実を食べた日、サリーが死んだ。

男は病床のサリーとアンナを最後に会わせる事ができなかったことを、申し訳なく想った。

あの時喧嘩なんてしなければ、ロイとのことを許していれば。
アンナの願いを叶えていれば。

そんな男の気持ちを察したのか、

「ありがとう、アンナによろしくね。」

そう言って微笑んだサリーの心はあまりにも深く、暖かだった。

男はサリーが死んでからは、夜遅くまで丘の上にいることにした。
かつてサリーがそうしたように。

アンナが出て行って10年。

今日も何事もなく1日が過ぎていくのだろうか。

そう思って木を眺めていると、丘の下から見知らぬ男がやってきて、
珍しそうに木を見上げた。

「珍しい木だろ？」

思わず声をかけた。

ここに来る人はこの街じゃ今はほとんどいない。

「はい、はじめてみました。」

「これは不思議な木だから…。何か願い事があるなら祈ってみるといい。」

「どういうことですか？」

「ははは、わからんよな、説明せんと。この木はな、願いや祈りを
実にするんだよ。」

「願いや祈り？」

「そう、その願いや祈りが叶えられた時、その実が落ちる。本当さ、
俺と女房はそうやって結ばれた。信じるか？」

見知らぬ男は、なんともいえないさそうな顔をしていた。

「ははは、まあいいさ信じられなくても。だが、俺はそれを10年
間ずっと見てきた。」

「10年も……」

「時には鳥が食べたりしてしまう。だから実が落ちるのを見るとほ
っとするんだよ。」

「……僕の願いや見届けてくれますか？」

10年も見守ってきたという男の話に、心が動かされたのか、見知
らぬ男はこの木に興味を持った。

「ああ、木に聞いてもらうといい。俺はいつでもここにいるから見
届けてやるよ。」

見知らぬ男は何か思ったことがあるらしい。

木に向かい何かつぶやくと、男に軽く微笑み、少し楽しそうに去っ
ていった。

誰かこうして話すのなんて久しぶりだ。もう少し話をしても良か
ったかもしれない。

男は少し清々しい気分で、今日は早く帰って少し豪華な暖かい夕飯
でも食べようと丘を後にした。

男が家に帰る途中、誰もいなくなった丘で暖かな風が木の枝を揺らし、木の実が落ちた。

F o r t h T R I P

なんだか、今夜は眠れなくて手紙を書いているよ。

ふと窓を開けたら、ふくろうの声が聞こえてきたんだ。
どんな話をしているんだろうね。

明日のお祭りの話し、蛸の舞う秘密の小川の話かな。
それとも、僕の大切な君の噂話だったりして。

ああ、僕にふくろうの言葉が解かれば混ざってくるのに。
君だったらどんな話をしたい？

眠れない夜だったけど、なんだかホッとしちゃったな。
今夜はいい夢が見れるかもしれない。

じゃ、君もいい夢が見れますように。
それじゃ、またね。

Fifth TRIP

やあ。元気かい？僕は元気にしてるよ。

僕は今日、お昼にコーヒーを飲んだんだ。

でも何故か無性に甘いのが飲みたくなっちゃって。

いつもはブラックなんだけどね。

それで、コーヒースUGAの塊を一つだけ入れたんだ。

砂糖が溶けて、内包されてた空気が少しずつ飛び出してくる。

まるでラムネをグラスに注いだ時みたいな泡のはじけ方に、妙に感動しちゃったよ。

甘いから出てきた粒子たちが見た世界はどんなだったかな。

僕に捕われちゃって悔しがってるかも。

なんだかもういっぱい飲みたくなっちゃったけど、また眠れなくなると困るから、やめとく。

それじゃ、また書くよ。

またね。

S i x t h T R I P

やあ、元気かい？

ね、川に降りて遊んだことってある？

僕は子供の頃に住んでいたのが河口付近で、よく川で遊んでいたんだけど、ふと川上がどうなっているのか気になったことがあってさ。川登をしたことがあるんだけど。

登るに連れてだんだんと石が大きくゴツゴツしてくる、少しずつ勾配が出てくる、川が細くなつて流れが速くなる。

そんな様子が楽しくて、でもどこか怖くてさ。

子供だったからかな、怖さを乗り越えるのがカッコイイと思っていたところがあって、どんどん登っていった。

結局これ以上は絶対いけないって所までいったんだ。

あの頃も今も僕は変わってないなあって思ったよ。

いまもこうやって自分が遠くに行くことを楽しんでいる。

あの頃も今も、知らないことを知りにいくのが楽しくて仕方ないんだ。

でも知らない風景に出会ったりしても、どうしてかな、君の事を思い出すんだ。

今日も川を見ながら君の事を思ったよ。

どんなに遠くに言っても、僕は君から離れられないみたいだな。

それじゃあ、また書くよ。

S e v e n t h T R I P

一日の終わりに。

山に落ちる夕日を見ながら考えたんだ。

今日の終わりに思うことはたくさんあるよね。

思ったより遠くにいけなかったこと、踏んでしまった花や、割ってしまった瓶のこと。

それから、君を残して旅に出たこと。

思い出すことは失敗や挫折とか、何故かマイナスのことが多いんだよね。

太陽が沈んでいなくなってしまう事が、ヒトには重要なことだったからなのかなって僕は思う。

太古ヒトは夜が来るのを畏れてた。

真っ暗な闇でいつ狼や獣に襲われるかわからなかったからね。

そういうDNAが僕や君の細胞にも組み込まれていて、夜になるとヒトはセンチメンタルになっちゃうんじゃないかな。

まあ、最近は夜に元気なヒトもいるけど、彼らはきつと夜行性の動物から進化したんだよ。

なんて、こんな事言ったらダーウィンに怒られちゃうな。

今日は君と夢で会えたらいいな。

それじゃ、またね。

E i g h t h T R I P

何だかなあ。

今日は旅に出る前の日々を思い出したんだよね。

まっすぐ伸び、まるで竹のような草が辺り一面に茂っていた。
胸ぐらいまでの高さで、見ていると何かを僕に訴えかけているよう
だった。

昔の…あの頃の僕は、いろんな事から逃げ出したかった。

僕はあまりにも何もナイ奴で、君はあまりにも輝いていてまっすぐ
で、君からも逃れてしまいたかったんだ。

この草達は天を目指して真っ直ぐ真っ直ぐ伸びている。
まるで君みたいじゃないか。

旅に出る前は、僕はひねくれてて、君をまっすぐに想う事ができな
かった。

でもね、こうやって旅に出て、色んな風景を通して君を想うたびに、
どんどん君に会いたくなる。

君とまっすぐに向き合いたくなってくるんだ。

今はまだ何かを通してしか君を思えないのがもどかしいな。

僕もいつか、この草達みたいになっすぐ君に向かっていきたい。

それじゃあ、なんか今日のはちょっと照れくさかったけど。

またね。

N i n t h T R I P

久しぶり。元気にしてた？

僕は今日大きな湖を船で渡ったんだ。

湖って言っても、日本のソレとは比べ物にならないくらい大きいんだ。

天気も良くて、波も穏やかで気持ち良かった。

船のエンジンがゴウンゴウンうなって、

そんな船に乗っていると、まるで波が固いからって、砕いて進んでいるみたいだった。

力強く進むちよつと古い船は懐かしくて、頼もしかったよ。

その船の船長は、この湖に住んでいるとても大きな魚を追っているんだ。

彼はまだ小さいころに、友達と遊んでてその魚を見たらしいんだけど、その時からいつかその魚を釣りたいと思っていたんだって。

古い船だから、そんなに大きな魚釣れるかどうかかわかんないって言いながら豪快に笑う彼は、とても素敵だった。

そんな彼の船だから、ますます頼もしく思えちゃったよ。

僕の船はどうか、手漕ぎボートかもね。
波に負けないくらいのなら良いんだけど。

君はどう思っているかな、なんて少し不安だな。

それじゃあ、また書くよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2066d/>

君への旅

2010年10月26日05時02分発行